アムジェン　企画　大岡俊彦

薬導入決定者（４０～５０代の医師）に刺さる、インパクトのあるストーリーを。

「もしスケバン刑事が今も戦っていて、病院に運び込まれてきたら？」

主演　南野陽子（５３歳）　as　麻宮サキ

と、名もなき医師

ストーリー　「薬の効かないヒーロー」

麻宮サキ(５３歳)が緊急搬送された先の、担当医が主人公。

だが彼女に薬が効かない。サキは「暗殺を避けるために、毒が効かない体質」だった。

医師は彼女に味方がいなく孤独で闘っていることを見抜き、味方になることで警戒を解き、ヒーローではなく一人の人間として彼女を扱い、信用されるのであった。

キャッチコピー

あなたの味方は、どこにでもいる。

医師、看護師、サポートする人々、そして薬。すべてが患者さんを安心させる、というストーリーになります。

アムジェン　ブランディング
「薬の効かないヒーロー」　３～４分

○某医院

セーラー服に皮手袋姿の、ヨーヨーを持った妙齢の女性（５３）が、緊急搬送されてくる。

当直の医師（４５）「怪我ですか？　病ですか？」

救急隊員「安静時に倒れたようで、怪我はなし。既往症、持病ともになしです」

医師　「検査してみないと分らない、と……」苦しそうな女性。

患者名を見た医師、驚く。

その恰好と見比べて。

医師　「五代陽子……まさか、『鉄仮面に顔を奪われ十と七歳（とおとななとせ）、二代目スケバン刑事、麻宮サキ』？」

女性（サキ）「（苦笑い）……『おまんら、ゆるさんぜよ！』が抜けてます……」

医師　「あ、すいません。あの……大ファンだったんで！」

○検査されるサキ

○数値を見ながら疑問に思う医師

医師　「おかしい……どうなってるんだ……」

○診察室

医師　「薬が……効かない体質？」

サキ　「そうや。暗殺や毒に備えて、ウチは鍛え上げたんや」

医師　「じゃあ、治るものも治らない」

サキ　「この病気は……治るんか？」

医師　「新薬があるんです。普通は効く」

サキ　「ウチは戦士や（ヨーヨーを構える）。

普通やない」
○一人考える医師
棚の薬たち（またはカタログ）を見ながら。
医師　「この薬なら効くのに……戦士って何だよ……」
看護師、走ってくる。
看護師「先生！　麻宮さんが脱走しました！」
医師　「なにい？」
○もぬけの空のベッド
○路地裏、夜
ビルの谷間で壁にもたれ、苦しそうにしているサキ。
そこに駆け付けた医師と看護師。
看護師「いました！　こっちです！」
医師　「なんで脱走なんかしたんだ！　麻宮さん、今自分がどういう状態か分ってるのか！」
サキ　「ウチには薬は効かん……だとしたらいても意味ないやん。ウチは戦いに行かな……」
医師　「馬鹿野郎！（思わず怒鳴る）」
サキ　「……」
医師　「あ、すいません。つい熱くなっちゃいました。……それで、薬の効かない理由が、分ったんです」
サキ　「なんよ？　ウチは戦士の体で……」
医師　「それだ」
サキ　「？」
医師　「暗殺されない為の体だと言いましたよね？　つまり、私を敵だと思っているんだ」
サキ　「それが何か？」
医師　「あなたは戦士だろうがなんだろうが、今は僕の患者です。ヒーローじゃない。一人の人間なんだ」

サキ　「……」
医師　「そして、人間になら効くと分ってる薬があるんです。薬も私も、彼女（看護師を指し）も、あなたの味方なんだ。青狼会の偽医者でも、鎌倉の老人の刺客でもない」
サキ　「詳しいな」
医師　「大ファンって言ったじゃないですか！」
サキ　「もう一度……人を信じていいのね？」

○時間経過、屋上、夕景

医師と看護師が休憩しているところに、サキが退院の挨拶にやってくる。
サキ　「先生、有難うございました」
医師　「また、戦いに？」
サキ　「（うなづく）……ウチ、ふつうの女子高生に戻る為に闘ってきたのに、人であることを拒否してたんやなって、ちょっと反省しました。いい薬になりました」
医師　「あ。……いや、セーラー服似合ってるし、えー、まるで女子高生みたいですよ？」
サキ　「それは無理があるやろ。先生、お世辞下手やで」
サキ、お辞儀をして去っていく。
ふと振り返る。
医師、ヨーヨーの真似をする。
サキ、笑ってヨーヨーを構える。

タイトル「あなたの味方は、どこにでもいる。」

【　アムジェン
患者さんのために、今できるすべてを。】